

ノリ養殖経過

坂口 研一

目的

三重県の黒ノリ養殖業の安定化を図るために、生産者に対して養殖環境についての情報提供や病害等の対策を指導するなど、きめ細かな対応が要求されている。そこでノリ漁場栄養塩調査、およびプランクトン調査を行いその情報を発信することにより生産者に対して現在の漁場の様子や今後の対応策についての情報を提供する。

方法

9月から3月までのノリ漁期中にノリ漁場栄養塩調査とプランクトン調査を実施した。栄養塩調査は伊勢湾のノリ漁場のうち、主漁場となる18測点の栄養塩とプランクトン発生状況を毎週水曜日に調査し、同日中に調査結果をFAXにより県内の関連漁協に送付した。分析項目は水温、塩分、溶存態無機窒素量、リン酸態リン量、プランクトン数である。これらの詳細については関連報文に報告したので、ここには概要を記載する。

結果

1. 今漁期の気象の特徴

気温は10月は平年に比べて高めで推移したが、11月は一変してかなり低めで推移した。12月、1月はおおむね平年並みで推移した。2月は高めで推移し、3月は平年並みであった。降水量は10月上旬、12月上旬、1月下旬、3月上旬に多め、10月下旬と11月中旬は少なめで推移した。日照時間は10月と3月がかなり多く、12月にかなり少なくなったが、その他の月は平年並みで推移した。

2. 今漁期の海況の特徴

白子地先の水温は陸上採苗が始まった9月後半から10月の野外採苗時と育苗初期は平年より高めで推移したが、11月上旬から1月下旬にかけてかなり低めで推移した。今漁期は大きな出水もなく、比重は漁期を通してほぼ平年並みであり非常に安定して推移した。桑名地区を除いた漁場の栄養塩量をみると溶存態無機窒素は9月下旬、11月下旬、1月下旬、2月下旬に低下がみられたが、すべて短期間で解消され、深刻な色落ちはなかった。リン

酸態リンは2月下旬と3月上旬に低下がみられたが、それ以外は比較的高水準で推移した。

3. ノリ養殖経過

糸状体培養は順調に行われ胞子嚢の形成や成熟は良好であった。9月下旬の水温は平年に比べ高めに推移し採苗が心配されたが陸上採苗は順調に行われた。海上採苗も水温降下状況を考慮して行われたこともあり順調に終了した。育苗期間中に白子では芽落ちが発生し、冷凍入庫直前には白子の漁場全体に広がった。その他の地区ではプランクトンの発生などによる栄養塩類の減少もみられたが、短期間で解消しおおむね順調に生育した。

冷凍入庫は早いところで10月末から、大部分で11月上旬が入庫のピークとなり、11月中旬までにほぼ終了した。秋芽網の本張りは早いところで11月上旬から開始され、11月下旬から摘採が本格化した。秋芽網生産期は栄養塩量が低い状態で継続することがなかったことから色目はおおむね良好であった。病被害は桑名地区では12月にスミノリがみられた。中勢地区と南勢地区で赤くされ病やバリカン症がみられたが、重症には到らず順調に生産が行われた。冷凍網の出庫時期は地区や個人により大きく異なり早いところでは12月中旬からはじまり1月下旬まで続いた。

冷凍網の摘採開始も出庫時期の違いから早いところで12月下旬、遅いところで2月上旬から始まった。冷凍網生産期にはプランクトンの発生があったが、いずれも短期間で終息し、栄養塩レベルが極端には低下しなかった。そのため軽度の色落ちが発生したが一時的なもので早期に解消された。3月上旬には強風のため、出漁できない日が続き、さらに3月7日の強風では全地区で施設被害が発生し、漁期の終盤の生産に大きな影響が出た。

今漁期の三重県の生産枚数は約4億6千500万枚で昨年に引き続き近年では比較的生産枚数の多い年であった。地区別の生産枚数は桑名地区1億2千100万枚、鈴鹿地区1億600万枚、中勢地区2千800万枚、南勢地区1億1千500万枚、鳥羽地区9千300万枚であった。平均単価は8.98円/枚で、生産金額は41億8千2百万円であった。

今漁期の平均単価は全国が9.29円 / 枚に対して三重県は8.98円 / 枚で全国平均を若干下回った。

関連報文

三重県科学技術振興センター水産研究部 鈴鹿水産研究室・三重県黒のり養殖研究会・三重県漁業協同組合連合会：平成14年度ノリ情報総集編